週刊 東京大学学生新聞

昭和32年（1957年）1月28日

21　堀江礼子
衛生看護学科生の前途
今春巣立つ第1回卒業生として
週刊東京大学学生新聞
昭和32年1月28日　1957

学生論壇

衛生看護学科生の前途

今春巣立つ第一回卒業生として

堀江礼子

昭和二八年、東大医学部に医学科、薬学科とならんで衛生看護学科が新設され、第一回の卒業生として私達がいよいよ今春社会へ巣立つことになつた。卒業を目前にして、私達に現在の日本の社会が求めているものは何か、それに対してどのように私達は応えようとしているのかについて述べてみたい。

戦後、アメリカ進駐軍の指示のもとに日本の公衆衛生を根底から指導する方針がたてられた際、まず医療関係者の教育制度に関する再検討が行なわれたが、看護関係もまた、その最も大きな影響をうけた一分野であつた。その結果、高等学校卒業者を三ケ年教育する看護学校と、中学卒業者を二ケ年教育を行う看護婦養成学校とが全国に二本立となつて出現した。

それは、看護も、科学、とくに医学のめざましい進歩につれて、従来の補助員的職種だけでその目的を達することができなくなつたので（1）現代の進んだ医学や衛生学、社会学、心理学の要点を学び、患者なり民衆なりが必要とするところを理解し、対処し得るだけの高度の知識と技術を要する看護面に働く人と（2）補助的な仕事の看護面を受もつ準看護婦とが必要だということからだつた。さらに、近代医学および心理学等々からみた看護術の学問的理論を研究し、近代看護学と看護術とを確立する任務を荷う者の養成が問題となつた。

文部省、厚生省の関係当局では日本の看護体系に筋金を入れたいというねらいから、外国のコンサルタント・ナースのような、大学教育を受けた卒業者で、看護学校、高等看護学院の教育陣を充実するとともに、将来の日本の看護学界の中核となるべき看護専門家を養成するという直接の目的があつて当学科が設けられた。

このようにして出発はしたものの、始めは具体的な教育計画はたつていないといつてよく、学生である私達自身が新しい学科にふさわしい内容をあたえてきたといつてもよいと思う。

事実、私達は、日本の医療の現状を直視することから始めなければならなかつた、私達が見たのは、治療と予防の隔絶、患者の早期発見、予防、アフタ・ケア（後療法）を含めた公衆衛生活動の不当な軽視等々、「民衆のため」の医学本来のありかたとかけ離れたアカデミズムと、それを助長するゆがめられた医療制度であつた。私達は、これまで世間一般に考えられていた「看護」だけでは充分でないことに気がついた。

病人とは、単に患部だけが悪い人のことではない。私達は、もつと広くその人の生活を包んでいる社会的、心理的な要因が病人を作り出していることを見つめたい。医師でなければ行うことの出来ない処置（手術、処方、投薬、放射線照射等）を除いて、全て医師と共同し、あるいは手分けして治療、予防、保健面で現代の保健医療が民衆の幸福のために活用されるような医療制度、看護制度を作ることに努力することだ。こんな話し合いのなかからクラスの人々は、「私達は社会のなかに生活している（患者）個人を対象として、そのダイナミックな関係をみのがすことなく、民衆のヘルス・ケアを行つてゆく使命があるのだ」という、一応将来への見透しを得るまでにいたつた。

今度の卒業生の入つていく分野は、始め考えられていた臨床看護よりずつと広がつて、労働基準監督官、官庁、会社の衛生管理者、都市のヘルス・ワーカー、更生補導等の公衆衛生や、理科・保健の教師として健康教育、さらには、当学科その他各大学の研究職員・研究所技官等、さまざまである。

私達の目ざすところは、民衆のあらゆる意味での健康を回復・保持・増進するために、医療関係者等の専門的職能者はもちろん、民衆の保健推進のために組織された種々の職能者および技術者からなるヘルス・ワーカーと協力しながら、積極的に医療本来の要求に応えていくことにあると思う。【ほりえ・れいこさんは東大医学部衛生看護学科四年】

教育システムは、前期一年半を駒場の教養学部で他の東大各科の学生と同様に広く一般教養を修め後期二年半は雑司谷東大分院で基礎、臨床各科専門課程を履修する。専門課程の内容は大きく分けて、基礎、臨床各医学、看護学および公衆衛生学からなり、これにそれぞれ実習がともなつている。